



Malawi Voice vol.7

～アフリカの国・マラウイからのおたより～

青年海外協力隊 平成27年度3次隊
言語聴覚士 飯田知美

ごあいさつ

海外で生活するうえでほとんどの人が避けては通れないもの、それは「異文化適合」。国内で生活をしていても、引っ越しをすれば、やはりその土地の文化や習慣を感じます。実際、私も18年間住み慣れた大阪を離れて広島で生活を始めた頃、やはり地域差を感じることは少なからずありました。一番は言葉の違い。大阪弁と広島弁という形の違いだけではありません。大学に入学して間もない頃、同じ大阪出身の友人と“普通に”会話をしていると、なぜか周囲が引いていく感じを受けました。後で聞くと、大阪人特有の、話すスピードや会話の勢い、そして「へたくそやな～。アホやな～」と相手をけなす言葉が多く登場するのに驚き、怖いと感じたというのが、他の地域出身の友人の回答でした。この時、「相手をけなすのは、“仲良くなりたい人”または“すでに仲がいい人”の証。本当にヘタだと思っている人にはヘタとは言えない。相手の実力を認めている証拠。」と説明をすると、その後は以前より受け入れてもらえたような気がします。同じように私自身も理由を知ること、納得し安心することもありました。

日本とマラウイでは、もちろん大きな文化の違いがあります。この全ての違いを「言語・宗教・生活習慣・経済状況・教育のせい」と大きなカテゴリーで片づけてしまうのは簡単です。しかし、この文化や習慣を生み出す背景にも、一つ一つ理由があります。

私は生徒たちの“不思議な行動”を見るたびに、いつも理由を聞くようにしています。「分からない」「先生（親）が言ったから」という答えも多いのですが、時々、「なるほど！」と思う答えも返ってきます。理由が分かると、不思議な行動がとても意味のあるものに見えてくることもしばしば。「異文化適合」はある程度“慣れ”という形で時間が解決してくれるものでもありますが、「なんとなく慣れて受け入れていく」のではなく、「理由を知って新しい価値観の発見とともに受け入れていく」こともできます。そこで今回は、約8ヵ月間のマラウイ生活で私が知った、この“違いの理由”の一部を紹介してみたいと思います。

2016年9月
飯田知美



“違いの理由”を考えてみよう



様々な文化の違いは、ネットやテレビでもよく紹介されています。ここでは、私が生徒たちと生活をしていく中で発見したものを中心に挙げています。中には、私が勝手に理由を推測したものや、私の配属先の生徒に特有なものもあるかもしれません。

1. 柔らかい…

運動好きな私が昔から体カテストで唯一苦手としていた種目。それが「長座体前屈」です。一応スポーツの前や寝る前（時々）などにストレッチを試みてみましたが、一向に改善しません。ふと思いつきで生徒にストレッチや筋トシの方法を教えて遊んでいた時、なんとそこにいた十数人全員が長座体前屈で足裏をガッチリ掴むことができ、さらに開脚した状態でひじをつくのも余裕でした。

「みんな毎日ストレッチでもしてるのか？」と思いましたが、もちろん答えはNOです。そして「どうして柔らかいの？」と尋ねても、逆に「どうしてできないの？」

と返されてしまいました。人種による体の違いなのかと強引に納得しかけたある日、寮の床を掃除している生徒の姿を見て、この疑問は解決しました。右の写真が、マラウイ流の床の掃除の仕方。膝を伸ばしたまま雑巾を左右に動かして後ろに進みます。この掃除の他に次に紹介する洗濯でも、膝を伸ばした状態で服を何度も地面に叩きつけます。そして、このような家事手伝いは、マラウイでは幼いころから子どもも当然のように行っています。当たり前の中で、自然とほぼ毎日あの“前屈ポーズ”をとっているのです。みんな柔らかいようです。ちなみに、女の子は胡坐をかく習慣はないので、股関節のストレッチは私の方が柔らかく、教える側のメンツを辛うじて保てました。



新 Standard8のストレッチの様子。
男女問わず余裕で掌が床につきます。



2. 伸びる服

マラウイにも洗濯機は売っていますが、かなり高価な商品のため基本的に洗濯は手洗いです。マラウイの JICA ボランティアで任地の家に洗濯機があるのは、シニアボランティアを除いて私が知る限りは2人しかいません（もっといるかもしれませんが）。もちろん私も手洗いです。

生徒の寮に遊びに行ったとき、洗濯のお手伝いをした日の出来事です。できるだけ早く乾いた方が良いと思い、いつものように洗った服を固く絞っている私の姿を見た生徒に「そんなに絞ったら服が伸びる！！」と言われました。確かに彼女たちは軽く絞って（時には全く絞らず）干している

ため、ポタポタと水が落ちています。しかし、その横でかなりの力で地面に服を叩きつけたり、力強くこすりながら洗っている姿を見て「いやいや、その方が伸びるでしょ！！」とツッコミ。実際、子供たちのTシャツの肩の部分はピロ〜ンと伸びていることが多いです。

なぜ、そんなに叩きつけて洗う必要があるのか？本人たちは「こうしないと汚れが落ちない」と主張しますが、私の家では軽いこすり洗いで十分きれいになります。そこで、試しに女子生徒の服を一着自宅に持ち帰り、自分のやり方で洗濯をしてみました。すると…何回すすいでも水はまるで泥水（右の写真）。生徒たちは何日も同じ服を着ています。理由は、服がたかさんない、洗濯の水や石鹸が豊富にない等です。そのため、服の汚れはかなりのもの。それでも女子生徒はマメに洗濯をする方です。写真は3回洗剤をつけてすすいだ時の状態です。この水を見て、叩きつけて洗う生徒に反論することをやめました。



3. 「えっ？もう食べごろ？」

マラウイでも日本と同様に、たくさんの種類の果物を楽しむことができます。最近旬を迎えたと思われるパパイヤや、少し前によく見かけた日本でもおなじみのオレンジやバナナなど、皮をむいてそのまま食べることができるので、時には停電時の救世主となります。

マラウイアンの方に遊びにいくと、よくお土産に果物をいただきます。村の家では、家の周囲に様々な種類の果樹がある家が多く、お金をかけずに人にあげられるものとして、果物はマラウイアンにも広く愛されています。しかし私にはある疑問が。写真は7月頃にいただいたオレンジです。「もう少し収穫を待っても良かったのでは？」と思いませんか？早速生徒になぜもうちょっと待てないのか聞いてみました。すると理由は2つ。1つ目は、これ以上待つと鳥に食べられてしまう。そして、もう1つは、近所の子供が盗んでいくとのことでした。空と陸の両方から来る“先客”を防ぐためだったんですね。



そういえば、私の家の敷地にあるパパイヤの実も、日に日に減っている気がします。

4. 真夏の…

最近暑くなってきてよく見かける生徒の服装。タンクトップ、半ズボン、サンダル、そして“ニット帽”。この学校に限らず、他の町に行った時にもこのスタイルはよく見かけます。ファッションに関しては国が違うので、当然違いもあると思いますが、私が疑問に感じたことは「暑くないの？」ということ。本人達に尋ねてみると、「暑くない」「そっちこそ何でそんなに汗かいてるの？」と言われました。日本人の友人とこの話題をしてみると、アフリカ人は日本人に比べて基礎代謝量が低いそうです。暑い国で生まれ育つ彼らは、その気候に適應するため、少ない汗の量でも体温調節ができるようです。ただし、もともとの汗を出す“汗腺”の量は彼らの方が多く、手の水分量は明らかに彼らの方が上です（この辺りの詳しい説明は専門外なのでよくわかりません）。握手をするといつも手がしっとりしています。シマを食べる時に、私は最近手を濡らしてから食べるようにしています。その方が、手にシマがくっつきにくいことを発見したからですが、もしかすると、彼らの手が食後も汚れが少ないのは、手の水分量が影響しているのでは…と最近思っています。

5. Mottainai（もったいない）

海外でも「Mottainai」で通じると一時期話題になったこの言葉。アフリカの途上国といえば、「短くなった鉛筆をくっつけて使う」「コップの水を最後の一滴まで飲む」という映像を頭に思い浮かべることがありませんか？もちろん物を大切に、最後まで使い切る場面を見かけることもたくさんあります。しかし、実際に一緒に生活をしてみると、物の扱いの雑さ（例えば教科書を渡す時に放り投げる、物をすぐに壊すなど）が目につきます。さらに驚いたのは、物をとっておくということをおまじりしません。例えば、寮生活をしている生徒たちのところに、時々家族（主に母親）が差し入れとして、お菓子やお金を持ってきます。すると、生徒たちはあっという間に全てを食べつくし、お金を使い果たします。そしてなくなると「お腹すいた…」と悲しい顔をします。一方、海外から寄付されたもの（機械系、付属の消耗品の電池など）は、全く使用されることなく倉庫に入ったまま。ひどい場合は一度も使われないまま壊れてしまったり、消費期限を迎えることもあります。

なぜこんなちぐはぐなことが起こるのか？まずは、食べ物をものすごい勢いで消費する生徒たちにその理由を聞いてみました。「置いておくと誰かに盗られる」「腐る」「なくなってから考える」「なくなったらきっと誰かが分けてくれる」など。置いておくと逆に無くなるという物理的な理由と、先を見通して考えることが苦手という部分が影響しているようです。

一方、寄付されたものを使わずにとっておくことについては、「壊したら今後寄付してもらえない」「使いこなせる人がいない」「（壊れた機械を）置いておけばそれを見てまた寄付が来る」とのこと。この理由には援助する側の国の責任もあります。



今回の「隊員紹介」で登場するバラカの施設の倉庫の写真。このダンボール全てが“未使用”の寄付されたものだそうです。

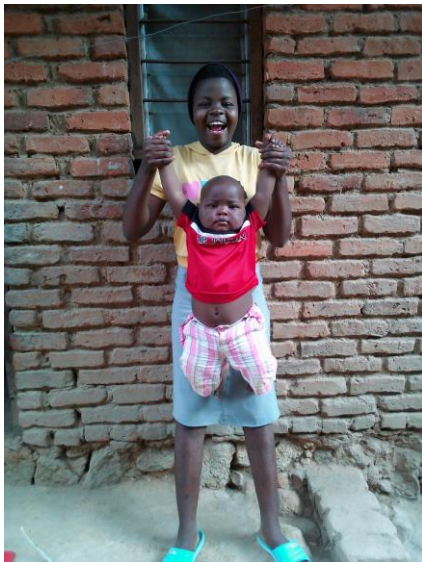


8月の活動の様子



今月はターム休み期間中なので、配属先での活動は全く行っていません。教材制作や活動計画の見直しなどの事務的な作業の他には、時間的に余裕のあるこの期間中に、他の隊員の見学を2件と、3人の卒業生の自宅訪問を行っていました。そのうち何人かが家にも訪ねてきてくれたため、マラウイ料理の勉強もしていました。任地で生活を始めて約7か月。だんだんと現地の生活に“慣れてきた”という表現よりも“現地人化”してきた気がする今日この頃です。

～ 生活風景 ～

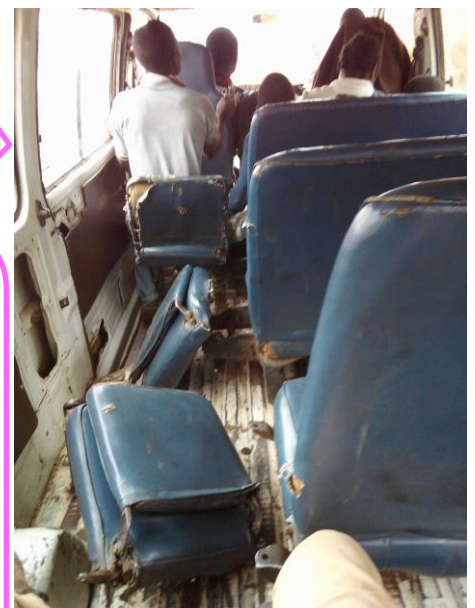


卒業生の家に遊びに行った時の写真です。ポッコリお腹がかわいい男子は彼女（18歳）の一番下の弟（8か月）です。右は彼女の下の子たち。さらに上に2人いるそうです。この家のような7人兄弟はマラウイでは特に珍しくありません。



ある日のミニバスの車内。ここまで内装がボロボロのミニバスはなかなか珍しいです。

家に遊びに来た生徒にお願いされた「黒染め」。もともと黒いのに染める必要がある？と思いましたが、日に焼けてやや茶色になった髪より、真っ黒な方がマラウイではおしゃれなのだそうです。





隊員紹介



前回に引き続き、今回も隊員紹介をしたいと思います。今回は、マラウイの中南部バラカで理学療法士として活動をしている同期隊員を紹介します。金野健人隊員は、マラウイに来る前、福島県二本松市で派遣前訓練を受けていた時、英語のテクニカルクラス（職種別クラス）でも同じクラスで学んでいました。ニックネームは“マロ”（理由は聞いたかもしれませんが、記憶にありません。ごめんねマロ）。訓練で疲れた心を癒してくれるソフトボイスの持ち主。訓練の時はバスケ、そしてマラウイに来てからは一緒にサッカーをした、貴重なスポーツ仲間でもあります。同じ医療系の職種ということもあり、情報交換ができる頼もしい存在でもあります。



隊員情報

（掲載内容は本人より了承を頂いています）

名前：金野 健人（この けんと）

隊次：平成 27 年度 3 次隊

職種：理学療法士

配属先：バラカ県 Sue Ryder Foundation in Malawi
（スーライダー基金マラウイ：NGO）

出身：北海道

～隊員からのメッセージ～

私の所属先であるスーライダー基金マラウイは、マラウイ南部バラカ県の中心地に位置しており、私は二代目の青年海外協力隊理学療法士隊員として派遣されました。スーライダー基金はイギリスの NGO でポーランドとマラウイに支部を持ち、私の所属するスーライダー基金ではバラカ県と隣接するンチェウ県の病院へ通うことが困難な僻地にある 100 ヶ所程度のクリニックで、薬の提供とリハビリテーションの提供を行っています。クリニックと言っても教会や大きな樹の下にゴザを敷き、そこで脳性麻痺や水頭症、マラリア性脳症、脳卒中などの患者さんの治療と家族指導を行っています。

私は高校生の時に理学療法士に興味を持ち、それと同じ時期にカンボジアの理学療法士隊員が地雷で足を失った子供たちのリハビリテーションを行っている姿を見て、将来自分も理学療法士として途上国の人たちの力になりたいと夢見ていました。大学を卒業後は北海道の地方の病院で 3 年の経験の後、退職しマラウイに来ました。マラウイでは子供たちのリハビリテーションがメインで知識・経験共に不足していますが、子供たちが将来の夢を持って生活できる社会を目指して同僚と共に活動しています。興味のある方は、私の所属している余市病院 地域国際医療支援センターの Facebook ページを見ていただくと、私の活動が確認できると思います。

金野 健人

～ バラカ・アウトリーチ ～

【BEFORE】



【AFTER】



長時間車に揺られてたどり着いた場所。“クリニック”に行くと聞いていたので、「奥の家のような建物がクリニックかな？」とっていると、右の写真のように、何もない地面にゴザとマットレスを敷き「This is our clinic!」と言われました。

実際のリハビリテーションの様子。
今回このクリニックを訪れた患者さんは4組でした。



スーライダーの敷地内にあるリハビリ施設の内観です。たくさんの器具がありました。通って来ることができる患者さんは、この部屋で外来としてリハビリを実施しているそうです。

スーライダーのオフィスの外観です。下左が事務所や他のNGOの事務所など、下がりハビリ施設や倉庫などです。



ヘルスセンター見学報告

前回のゾンバヘルスセンターに続き、お隣プランタイヤ県のチクリという村にあるヘルスセンターの見学に行ってきました。マラウイのヘルスセンターについてご紹介します。

1. ヘルスセンターの役割

前回のおたよりでお話したように、ヘルスセンターは、30kmに1つの設置基準でマラウイ全国にたくさんあります（設置基準が守られているかどうかは不明）。マラウイにも、病院はありますが、やはり都市部に集中しており、村で生活する人々が交通費をかけて病院に通うのは困難な場合も多いです。ヘルスセンターは、マラリアの治療やケガの治療、薬の処方を行う“クリニック”としての役割を果たし、また、妊婦指導・出産・エイズ検査を行う“助産院”、予防接種や子供の定期健診を行う“保健センター”の役割も兼ねそろえています。さらには、家庭を巡回して栄養指導をするなどの活動も行っているそうです。

2. Under5（アンダーファイブ）

日本でも1歳半健診や3歳児健診などがありますが、マラウイでは基本的に5歳までの子どもは毎月1回定期健診に通うことになっています。その健診を行うところがUnder5です。実際には、3歳以上の子どもはほとんど健診に来ることはなく、赤ちゃんの健診がほとんどのようです。

この健診の最大の目的は栄養失調児かどうかを判断すること。健診内容は身長・体重測定、二の腕周りの長さ測定、足の甲やすねの浮腫（むくみ）がないかどうかのチェックを行います。写真を撮れなかったのですが、体重は、木につるした吊りばかりに、チテンジ（布）でくるんだ子どもを吊るして測定していました。マラウイにも、日本のように「成長曲線」のグラフがあり、この健診で正常範囲を下回る“栄養失調児”と認定された子どもには、ユニセフの認定カードが配布され、無料でソヤ（大豆）の栄養剤が支給されます。

日本の健診では、運動面やことばの発達の確認もされたりしていますが、マラウイでは行われていませんでした。私が見学をした目的の一つが「Under5の健診で簡易の聴力検査を導入して難聴の早期発見はできるか？」ということの確認でしたが、見学をしてみて、利用者の数の多さや、職員の人手と技量、現在の健診内容などから、すぐにどうにかなるものではないと感じました。

3. クリニック

患者の診察やケガの治療を行う場所ですが、ほとんどがマラリア患者でした。クリニックに掲示してあった表を見ると、今年の4月のマラリア患者（検査で陽性となった患者）は延べ1700人程度で、そのうち5歳以下の子どもは800人程度もいました。蚊が増える雨季になると、この数はさらに増えるとのことでした。これは、このヘルスセンターだけの人数なので、その数の多さに驚きました。

ヘルスセンターでは、手術や重症患者の治療は行えないので、高度な治療が必要な患者は、国立病院などの大きな病院に送られます。

4. 産科

マラウイでは、基本的にヘルスセンター（または病院）以外での出産は禁止されています（しかし、実際には家庭で出産するケースも珍しくはないようです）。私立病院で出産をする費用を払える家庭はかなり少ないので、ほとんどの妊婦がヘルスセンターで出産をします。

このヘルスセンターでは、産科にベッドがいくつかありますが、このベッドは体調に異常のある妊婦または、産後の母子が使用します。基本的には出産直前にヘルスセンターに来て、出産後 24 時間以内（これ以上はいることができない）に自宅へ歩いて帰っていきます。ところが、家庭によっては、ヘルスセンターからの距離が遠く、直前に歩いてくるのが難しい場合もあります。そのような妊婦は、前日または数日前にヘルスセンターに来て、寝泊まりをして、出産ののを待ちます。チクリのヘルスセンターには、こういった妊婦が宿泊できる建物はありません（現在工事中）。そのため、野宿のように建物のそばで寝ているとのことでした。ヘルスセンターでは 24 時間体制で看護師が常駐していて、出産に対応しています。

マラウイでは母乳育児が基本で、2歳まで母乳育児を続けることが推奨されています。母親が HIV 検査で“陽性”とされた場合でも、「母乳からの感染はない」という考えから、母乳育児を進めています。



生まれて数日の赤ちゃん。ヘルスセンターの近くに住む、隊員の知り合いの家で撮らせてもらいました。

以前、生徒の家の近所で、「今日生まれた」という赤ちゃんを抱っこさせてもらう機会がありました。日本では数日入院することが当たり前なので、生まれたばかりの他人の赤ちゃんを抱っこする経験なんてできませんよね。

実際に出産をする分娩室の様子です。物がきちんと整理されていて、とてもきれいでした。

このヘルスセンターでは、看護師の「申し送り」もされていて、この部屋の隣にある看護師が待機する部屋のボードに、手書きで妊婦の情報などが書かれています。

